

# 杜甫の詩と生活 (四)

——「現代訓読文」で漢詩を読む（漢文教育の一探求として）

古  
川  
末  
喜

佐賀大学文化教育学部研究論文集 第17集 第2号  
JOURNAL OF THE FACULTY OF CULTURE AND EDUCATION  
SAGA UNIVERSITY  
VOLUME 17, NUMBER 2  
January 2013

# 杜甫の詩と生活 (四)

——「現代訓読文」で漢詩を読む（漢文教育の一探求として）

古川 末喜

DUFU (712-770)'S POETRY AND HIS LIFE (4)

Sueki FURUKAWA

## 『要旨』

本稿は、本誌前号の『佐賀大学文化教育学部研究論文集』第十七集第一号（二〇一二年八月）に掲載した「杜甫の詩と生活（三）——現代文による新しい訓読の試み——漢文教育の一探求として」の続編である。一号から三号まで試みてきた「現代文による新しい訓読」を、本号から、略して「現代訓読文」と呼ぶことにする。

依拠したテキストや訳注本、また体裁等は前稿に同じである。毎章の中心には、詩の原文とその伝統的な訓読を示し、次に段落をかえて、本稿で新しく試みる現代訓読文を、その後には、注解も含めた解説的な口語訳をおいている。詩の前には、その詩が書かれたいきさつや、その時期の伝記的狀況などを主に記している。詩の後には、詩の題材やテーマ、表現の特色などについて、私を感じたところを自由に書きつらねている。その部分は、わたしはこの詩をこう読んだ、こう感じたという私自身の感想に過ぎず、こう読んだがいいなどと言う、提言などではない。わたしのここでの読み方が、読者の反論や共感を呼び起こし、新たな詩の鑑賞を創り出すきっかけともなれば幸いである。

一 白銀の花びらのごと 乱れ散るシラウオ

[1742\_白小]

前稿に引き続き、この詩も永泰二年（七六六）の作。このとき杜甫は数えて五十五歳、余命五年弱である。永泰二年（七六六）の十一月、改元して大暦元年となった。よって本稿では、これ以後、七六六年はみな大暦元年と称することにす。

この年の三月、すぐ下流にある雲安から、夔州に到着した杜甫は、東に流れる長江を眼下に見おろしながら、長江の左岸ともなる、赤甲山（子陽山）の斜面に住んでいた。同時に、杜甫が西閣と呼んでいる、白帝山の西側山腹にある楼閣にも仮住まいし、両方を行き来していた（簡錦松氏の説による）。翌年春には、白帝山の東方面の瀼西の地に引越すことになるが、それと違って、いま杜甫が住んでいるのは、夔州の庁舎などがある白帝山の北山麓や西側で、より繁華な方である。

このころ杜甫は、カモメ、猿、黄魚、シラウオ、四つ目鹿、鶏を詩題にした、詠物の詩を立て続けに作っている。これらは、杜甫詩集の最も古い形を残している宋代の刊本では、同じ巻十六で一箇所にまとめて置かれているので、同じ時期の作と考えてよいだろう。みな夔州の現地で見た魚類や鳥獣である。

詠物詩は、その物を客観的に描写するのだが、同時に微妙に作者の境遇を重ねあわせて歌っている所もある。したがって多くは物自体の描写と寓意と、二重に読むことができる。表面的な読みにとどめておくか、内側まで敢えて読み込むかは、読者の好みにまかされる。

### 白小

白小羣分命、

白小は 命を羣分され

天然二寸魚。

天然 二寸の魚なり

細微霑水族、

細微にして 水族に霑うも

風俗當園蔬。

風俗 園蔬に當つ

入肆銀花亂、

肆に入れば 銀花 乱れ

傾筐雪片虛。

筐に傾くれば 雪片 虚し

生成猶拾卵、

生成 猶お卵を拾い

盡取義何如。

尽く取る 義は何如

白くして小さきもの

白くして 小さけれど 群みな ひとつの命を 分かれたれて

天より さずかる 然にして ながさ二寸の 魚なり

この細く 微なるもの 水にすむ 族となりえ てんのめぐみに 霑うも

このちの風俗 あたかも園の 蔬のごとく みなし當つ

みずあげされ 肆みせに入れば 銀しろがねの花はなびらのごと きらきら乱みだれ  
 籠たけかごに 傾かたむけいださるるや とけてはきゆる雪ゆきの片ひとひらのごと あやうく虚むなし  
 生まれそだつて やがておおきく成なれるもの 猶なお その卵たまごまで 拾ひろいあつめ  
 尽ことごとく 取とりつくすは ただしかるべき義みちとして それ何いかん如

「白くて小さい魚」

白くて小さいのだけれども、みなそれぞれに一つの命を分け与えられており、生まれながらにして長さは五、六センチメートルしかなく、

この取るに足りない小さなものは、ありがたくも造物主より、水生動物の仲間に入れてもらった恩恵に、うるおっている。しかしこの夔州の地の風俗では、平凡な野菜の一種とみなされ粗末に扱われている。

川岸から魚市場に運び込まれるときには、白銀の花びらがキラキラと、輝いて散り乱れるようであり、個々の竹かごの容器に傾け出されると、すぐに消えてしまうひとひらの雪のように、はかないものだ。

この世で命を与えられ生成していくこの小さな魚を、その卵まで拾い上げて、残らず取り尽くすというのは、万物生成の正しくあるべき道理としては、どんなものであるうか。

\* \* \*

長江の三峡一帯でとれる、体長数センチの白くて小さな魚を詠んだもの。中国の文献では銀魚と解されており、ここではシラウオと呼んでおくことにする。銀魚は、長江中下流域や洞庭湖・鄱陽湖などにすみ、体長は十センチ前後で、いくつかの仲間がいる。

夔州に滞在するようになって、杜甫はじめてこのシラウオをじっくり観察したのだろう。水揚げされたシラウオを、杜甫は実際に市場で見えており、市場に運び込まれたときは、散乱した白銀の花びらのようだといい、竹籠に入れたときは、すぐに溶けてしまう一片の雪のようだと述べている。

しかもこんなに小さいのに、ちゃんと造物主から生命を分与され、万物が生成死滅するこの世界の中で、水生動物の一族としての居場所が、しっかり保証されているのだ。「水族に霑う」のわずか三文字で、そのことが実によく表されている。とくに「霑う」という一字が荷っている意味は大きい。

それが夔州の習俗では、畑の野菜のように安価なものとして、粗末に扱われている。たしかに小動物ではあるが、植物として扱われ、その存在意義がないがしろにされている。こんなことでいいのかという義憤が杜甫にはある。たとえその存在が微小なものであっても、その本来の存在価値がきちんと認められた上で、正当に評価され、それなりの尊厳を持った扱いを受けるべきだ、というのが、暗に杜甫の訴えたかったことである。

命の重さは、杜甫にとって、形の大きい小さいは関係ない。たとえ小さかろうと大きかろうと、命としては、みな平等に大切なのである。命の重さに差別をつけない、平等博愛の思想は、はかなくも小さいこの命を、美しいと感じている気持ちと一体になっている。命がありこの世に存在しているものは、杜甫にとってはおそらく、みな美しさも同時に持っているのである。美しいという作者のこの実感に、裏打ちされているかどうか、同じ平等博愛の精神を説いたにせよ、たとえば道徳家と詩人との違いではなからうか。

所謂「子持ちシシャモ」ではないが、このシラウオも産卵期前の、卵持ちのほうがいいとされる。杜甫が市場で見たシラウオも、「子持ちシラウオ」が売られていたのかもしれない。だから最後の二句で杜甫は、生まれてきたものを卵まで取り尽くすのは、人の道としてどうか、という問題提起をおこなったのではないか。

このような卵まで取り尽くすなという思想は、すでに古くから儒家經典のなかにあり、中国のすぐれた思想の一つであろう。なお魚を詠んだこの五言律詩は、偶数句の句末で、魚、蔬、虚、如の字を用いて韻を踏んでいる。この四つの韻字は、広韻の上平第九の魚の韻である。他の詠物詩の作り方と比べてみても、これは杜甫の遊びというわけではなく、単なる偶然であろう。とはいえ楽しい偶然ではある。

二 一 むしとにわとり いずれの命か重き

[1816]縛鶏行

前の詩と同じく大暦元年（七六六）の作。詩中に「寒江」とあり、季節は冬と考えられている。

近代以前、鶏はいつも人の身近なところにいて、その卵や肉は、手頃で上等の動物性タンパク質として重宝された。『論語』には、孔子からはぐれた弟子の子路を、隠者が家に泊めて、鶏をしめ殺し、黍のご飯を炊いて、もてなしたとある。いわゆる「鶏黍」の言葉の由来である。

『齊民要術』は六世紀中ごろ、中国の華北地方で成立した農書で、その第五十九「養鶏」の章は、もっぱら鶏の飼育法を記している。八世紀、中国西南の夔州でも、鶏を飼育するのは、かなり一般的であったようである。杜甫の遠縁にあたる杜崇簡という人物が、現地で本格的に養鶏を業としていたことを、杜甫は「180」従孫の崇簡に寄すの詩で取り上げている。

杜甫も夔州入りして、すぐ赤甲山の山腹にあった住居で、鶏の飼育をはじめた。四川原産とされる烏骨鶏である。「180」むすこの宗文を催して鶏の柵を樹てしむの詩によれば、杜甫は、大暦元年の春から烏骨鶏を飼い始め、夏には五十羽ほどの成鳥になっていた。それらの鶏ときたら、家の中にまで入り込んでたために暴れ回り、どうしようもないほどだった。

驅おいはらい 趁おぼいださんとするも にげまわるにわとりを われは制せいし禁とどめえず 驅おいはら 趁おぼ制せい不とど禁め、  
 山のなかほど 腰こしあたりの わが宅いえに にわとりども喧かまむすしく 喧よ呼よびさけぶ 喧よ呼よ山腰宅、  
 あしもて踏ふみしだき ふみ藉しきて 盤おぼらや案おせんなどをば やたら翻ひるがえし 踏ふ藉し盤おぼら案おせん翻、  
 終日しゅうじつ われは 赤あかき とさかの幘かんむりつけたる にわとりを 憎にくむ 終日憎赤幘、

そこで杜甫は、長男の杜宗文に、使用人と一緒に、鶏を押し込める柵と、竹籠とを作らせることにした。同時にそれによって、鶏に食われてしま

う蟻やケラたちの厄難をゆるめてやり、鶏に對してもキツネやムジナに襲われる危険から、身を防いでやることができると考えたからである。

我は 螻や蟻のむしけらの にわとりのわざわいに遭すを 寛くしてやり 我寛螻蟻遭、  
彼ら にわとりは 狐や貉に かわるる厄を 免るるをえん 彼免狐貉厄。

おそらく次の詩に歌われる鶏も、この烏骨鶏であつたろう。

なおお詩題の「行」は「うた」の意味で韻文のジャンルの一つ。古体詩に属し、押韻も比較的自由で、律詩のような平仄交代の規則はない。

## 縛雞行

## 縛鶏行

小奴縛雞向市賣、  
小奴 鶏を縛り 市に向かつて売らんとす

雞被縛急相喧争。  
鶏 縛らるること急にして 相い喧争す

家中厭雞食蟲蟻、  
家中 鶏の虫蟻を食するを厭うも

不知雞賣還遭烹。  
知らず 鶏 売らるれば 還た烹らるるに遭うを

蟲雞於人何厚薄、  
虫と鶏と 人に於けるや 何の厚薄かあらん

吾叱奴人解其縛。  
吾 奴人を叱つて 其の縛を解かしむ

雞蟲得失無了時、  
鶏と虫の得失 了る時 無し

注目寒江倚山閣。  
目を寒江に注いで 山閣に倚る

## 鶏を縛る行

わがやの小さき奴 いえにやしなう鶏 市ばに向いて 売らんとす

鶏 縛らるること 急しくして 相い喧しく 争いもがく

家中のものみな 鶏の 虫や蟻を ついばみ食らうを 厭いきらうも

鶏の ひとたび ひとに売らるれば 還た 烹らるるに遭うを 知らず

虫と鶏 人に於けるや 何れぞ厚き いずれぞ薄きの ちがいはあらんや

吾は 奴の人を 叱りつけ 其の縛れるを 解かしめたり

鶏と虫 なにを得て なにを失う このはなし やみて了る 時は無し

目を 寒げなる江に 注ぎつつ われは山べの閣に 倚りかかるのみ

「家の鶏がしばらく売られようとするのを見てつくりし歌」

鶏たちがきつく縛りあげられ、バタバタともがいて、けたたましく叫んでいる。いったい何の騒ぎかと思ったら、我が家の召使いの少年が、家で飼っている鶏をしばって、市場で売ろうとしているのだ。

鶏が、虫や蟻などを食べて殺生しているのがいやで、家人が鶏を売りに出そうとしたのだ。しかし鶏が売られたら、今度は買った人に、逆に煮られて殺されてしまう。家人はそのことに気づいていないのだ。

虫と鶏は、人間においてはどちらがより身近で、どちらがより疎遠だろうか。そんな違いは無い。わたしは使用人をしかって、縛られた鶏を、またもこのようにほどこいて自由にさせた。

鶏と虫についての利害損得、そのどちらを助け、どちらを見捨てるか、この問題はいくら考えても、結局は解決が付かない。わたしはこの夔州の山沿いの、二階建ての仮住まいにたたずみ、答えを出すことができずに、ただ冬の長江の流れに向かってじっと眼差しを注ぐだけだ。

\* \* \*

この詩には、客居中の杜甫の家庭内で起こった小さな衝突が描かれている。

ある朝のこと、庭の方からけたたましい、鶏の鳴き声が聞こえてきた。少年の使用人が、市場に売りにいこうと、次々と鶏の足を縛っているのだ。鶏たちは逃れようと、必至であれば、鳴き叫んでいる。

杜甫の夫人は熱心な仏教の信者だった。だから虫が鶏に食べられるのを可哀想に思い、そんな鶏は売ってしまいなさいと、使用人に言い付けたに違いない。いや、二人の娘たちが、生きながらにして鶏に食われる虫の「残酷な」シーンを発見し、母親に言いつけたのかもしれない。さらに想像をたくましくすれば、杜甫一家にずっと付き従ってきた、ほとんど家族同然の召使いの「婆や」も、同じようにきつと信心深い心から、母娘たちに同調したのかもしれない。杜甫一家には必ずや、古くから付き随ってきた男女の召使いが二三人はいたであろうから。女たちは慈悲の心から、目の前で鶏から食われてしまう、虫の命を助けたかったのだ。また鶏を縛ったこの使用人も、もしも他の詩に出てくる信行という名の若者なら、かれも篤く仏教を信じていた。夫人や娘たちの意を呈して、鶏を縛ることにいつそう積極的に、荷担していたのかもしれない。

杜甫からすれば、彼らはみな目先の虫のことしか見ていず、売られたあとの鶏のことを考えていない。鶏だつて人に買われたら、煮て食われてしまうのだ。同じように仏教心を持つ杜甫にとつても、鶏の命も、虫と同じように大事なものの。どちらが重い軽いの差は付けられない。杜甫は、思わず使用人を叱りつけて、鶏の縄をほどかせた。

使用人を叱りつけているこのときの杜甫は、なぜ必要以上に不機嫌である。額に青筋でも立てて、何か八つ当たりでもしているのだろうか。杜甫の心はささくれだっているようにみえる。一家の経営者として、杜甫には鶏を飼育する必要があった。なにも好きこのんで、小さな家にたくさんさんの鶏を飼っていたわけではない。だが彼女らには、一家の経済は見えない。鶏が虫を啄み、虫が可哀想という、目の前のことしか見えていない。生計をなう夫、父親の苦勞は、彼女らにはどこまで思いやられていたことか。

自分一人が慈悲心のない人間にされてしまったような、やり場のない疎外感を、杜甫は使用人に八つ当たりしているのかもしれない。詩聖らし

からぬ「叱る」という、感情むき出しの生々しい言葉から、ついこういう背景を想像してみたくなる。

それはともかく、杜甫がここで鶏を救ったのは、虫の命より鶏が大事だと、熟慮した上でのことではあるまい。目の前の、売られていこうとする鶏を見て、とっさにそれを押しとどめたのだろう。また鶏に食われる虫を可哀想と思った、家人たちの浅い思慮を、正さなければという思いもあつたのかもしれない。

しかし、よくよく考えてみると、鶏を救うということは、虫を見殺しにすることだ。虫だって同じように、救われるべきである。どちらを救うべきか救うべきでないのか、杜甫はいくら考えてみても分からない。

この詩の登場人物は、使用人と作者と鶏の三つである。背景には杜甫の家人も控えている。重税に苦しむ農民が登場するわけでもないし、戦争で大勢の人間が殺されているわけでもない。鶏が大事か虫が大事か、些細と言えど些細な問題である。だからであろう、この杜甫の詩から、後に「鶏虫の得失」という成語が生まれた。その意味は、杜甫の意図から反対のものとなり、緊要なことには関わらない、微少な事柄の得失を、比喩する言葉となつてしまった。

しかし杜甫はえらく真顔である。たしかに突きつめれば、生と死の食物連鎖の根本的な問題に突き当たり、解決はむずかしい。だが一見、こんな些細な問題で、杜甫が真剣に悩み、問題を解決できずにいる。そしてそのことを、正直にさらけ出している。そこにこの詩の面白さがある。

詩法としても、その最後の聯で安易な結論を出さず、そのまま放りだしているのがいい。杜甫はただじっと、太古より滔滔と流れ続ける長江の流れに、目を注ぐだけである。特に句末の一行がだんぜん垢抜けしている。鶏と虫についての、地面を這いつくばうようなごたごた話しから、突然、一次元上の世界に抜けだしている。含蓄を持ったこの最後の一句で、詩全体も意味深いものとなり得ている。

また、ほとんど毎行に「鶏」の字が出てくる。さらに、字句をひっくり返して用いているところがある。「縛鶏」と言い、次に「鶏縛」と言う。「虫鶏」と言い、また「鶏虫」と言う。この繰り返しから軽快なリズム感が生じて、取りようによっては、ひどく重い主題の詩を、なじみやすくしている。

### 三 何ぞ幸いなる 子らの腹を満たせるは

[1840「王十五前閣會」]

夔州に来て二年め、大暦二年（七六七）、春の作。杜甫はこの年、五十六歳となる。住まいは、まだ赤甲山と白帝城の宿舎の西閣、その両方にあつたであろう。

この詩で王十五と記される人物が、どういう人なのかはよく分からない。杜甫の詩では、このほかあと二首の詩に出てくるが、それがみな同一人物なのか、違うのか、あるいはその中の二人が同じなのか等々、はっきりしない。

一人は、これより四年前、杜甫がまだ梓州にいたとき、知り合った王十五である。

[1240「送王十五判官扶侍還黔中」]

判官のつとめなる王十五どのが ははおやを扶けつつ つかえ侍りて ふるさとの黔中に還りゆくを送る  
 の詩に出てくる。この王十五は、地方長官の参謀官であったのだが、このたび母親が、遠く故郷の黔中（四川省、貴州省の省境にあり長江の南側の山岳地帯）へと帰ることになったので、いったん職を辞し、親に付き添って行くことになった。杜甫は詩の中で、そんな親思いの王十五を褒めそやしている。陳貽焮氏は『杜甫評伝』のなかで、いまその彼が、親へのつとめを果たして、夔州に来ていたのだと考えている。

もう一人は、七年前、杜甫が成都に草堂を作り始めたとき、建築資金を援助した遠縁の王十五である。

〔0915〕王十五司馬弟出郭相訪遺營草堂贊

司馬のつとめなる とおえんの弟の王十五どのが、せいとの郭を出でて 相を訪ねきて わが草ぶきの堂を営む賢を 遣れり  
 の詩に出てくる。八年前、秦州を出発した杜甫は、長い難儀の道のりをへて成都入りし、その翌年から成都の郊外に草堂を営みはじめた。そのとき、いろいろな人から援助を受けているが、そのうちの一人が、遠縁の従弟にあたる王十五であった。この王十五の可能性がやや高いというのは、古くは聞一多氏、近年には魯東大学の陳冠明氏などである。

この二つの説、いずれも確たる証拠は無い。この二人とは、まったくの別人かもしれないのである。しかし杜甫を、その子供と一緒に招待してくれたこの詩の情感を考えると、どちらかといえば、わたしも、杜甫に建築資金を援助してくれた遠縁の、二番目の王十五の可能性に荷担したくなる。

王十五前閣會 王十五が前閣の會

楚岸收新雨、 楚岸 新雨 収まり

春臺引細風。 春臺 細風を引く

情人來石上、 情人 石上に來たり

鮮膾出江中。 鮮膾 江中より出ず

鄰舍煩書札、 鄰舍 書札を煩わし

肩輿強老翁。 肩輿 老翁に強う

病身虛俊味、 病身 俊味を虚しうし

何幸飲兒童。 何の幸ぞ 兒童を飮かしむ

としのかず 十五ばんめに あたる王どのが やどの前にある閣にて もよおせる さけの会まり  
 楚のくにの このちの岸べに 新たにふりし はる雨も いまは やみて収まり

うららかな 春はるの台うてなに 細こまやかな風かぜ かすかに引ひかれて ふききたる  
 情なさけあつき かの人ひと おうどのは 石いしの上にぼとり あらわれ来きたり  
 鮮あたらしき膾なますは めのまえの 江かわの中なかより 出いできたる  
 隣となりあう 舎いえのよしみに おうどのは 書ふ札み 煩わづらわして われにもたらし  
 肩かたかつぎの 輿かこをよこして 老おいほれ翁じいの われにのれとぞ むり強じいす  
 病やめるこの身みは せつかくの 俊すくれたる味あじも 虚むなしくおほゆれど  
 何なんぞ幸さいわいなる わが児むすこ童らを はらいっぱいに 飫あかしめしこと

「王一家の十五番目の兄弟にあたるおかたが、わたしの宿の前方にある高閣でひらかれた宴会」

目の前の長江を一気に下れば、ただちに楚の国の地なので、この夔州は楚とも呼ばれるのだが、その長江の岸边では、降ったばかりの春雨がちょうど止んだところである。春のうらかな日射しのなかで、見晴らしのよい高台には、やわらかな微風が吹き込んでいます。

情に厚い王十五殿が、高閣の石の高台にやって来て、いよいよ今から宴会を始めなさる。宴会のご馳走には、新鮮な魚の刺身が並べられ、それは目の前の長江から取りたてのもの。

彼は隣人どうしのよしみということで、わざわざわたしに招待状をよこし、丁寧にも担ぎかごまで用意して、うむを言わず、この老翁の私を招いてくれたのだ。

だが、病気のこの身では、せつかくの料理も十分に食うことができず、このすばらしい味を意味のないものにしてしまった。しかし息子たち二人も一緒に招待してもらったおかげで、彼らのおなかを満腹にさせることができた。これは、何と幸いなことか。

\* \* \*

宴会に招待してもらったことを謝した詩である。

杜甫には、人を招待したときよりは、招待されたときの詩のほうが圧倒的に多い。杜甫が正式な官についていた時期は、五十九年の生涯で四年にも満たない。四十代前半までは無位無官の就職浪人で、四十八歳以降は、人の好意に頼つての流浪の人生となるから、当然と言えば当然であろう。

感謝を表した杜甫の詩には、当事者にしか当てはまらないような具体的な状況が描かれ、その場に特有の気持ちがかめられている。何にでも当てはまるような、一般的な謝礼の詩ではない。相手が杜甫を招待してよかつたと、心から思えるような、また杜甫からこんな詩をもらった人は、きつと嬉しかろう、というような詩となっている。この詩では、新鮮な川魚の刺身料理が出されこと、かつぎの駕籠を寄こしてもらったこと、子供まで招待してもらったこと、などがこの宴席の具体的な状況であろう。

この日のメイン料理は、目の前の長江からあがった、新鮮な魚の刺身だったと思われる。取り立ての新鮮な生魚を細切りにした、いわゆる刺身は、かつては中国でもよく食べられていた。唐詩にもときどき見える。杜甫は五年前、綿州の涪江で、魴魚というコイ科の刺身を食べ、詩を作っている。「[116]魚を あみ打つを観るの歌」の詩に、「魴魚の肥えて美きこと ほかとくらべて第一なるを知る」とその美味を絶賛しながら、料理人の包丁さばきを、

饗子は 霜ふりの さしみ刀を 左右に揮い

饗子左右揮霜刀、

鱠は飛びて 金の盤にもられゆき ぶりつもる白雪のごと うず高し

鱣飛金盤白雪高。

と詠じている。

一般的に社交や儀礼の詩には、修辭に凝ったものが多い。たいていどの詩人もよく使う手が、あまり人の用いそうにない難しそうな典故を、うまく加工して対句の中に持ち込むことである。これだと詩の技巧と同時に、自分の学問の深さも示すことができ、一石二鳥である。ただ杜甫の場合、人の知らないような典故（いわゆる僻典）は、ほとんど用いない。

この詩には典故は用いていないが、その代わりというわけでもないだろうが、三字めすべてに動詞を用い、それぞれの聯のなかで対にしている。収まりて、引く／来たりて、出す／煩わして、強いる／虚しくして、飢かしむ／

このように三字めすべてに動詞を置くことで、句の構造に一つの行進曲的なりズムが生まれてくる。三字めに注意しながら、もう一度読んでみればすぐ気づく。杜甫は意図的にそのような実験、あるいは遊びをしているのであろう。

その三字めだが、五句めの「強いる」という字が、絶妙である。普通、強いられる方は、何事につけ愉快ではないはずなのに、このように目上の相手から、心地よいことを強いられると表現すると、相手への敬意を保持しつつ、どことなく甘ったるい、なれ合い的な、親しみの込められた意味に変化してしまう。この「強」の一字で、杜甫と王十五の関係の親密さや、杜甫の感謝の気持ちがよく表されていると言えよう。

とはいえ、この詩の出色のところは、最後の一句、子供まで腹いっぱい食べさせてもらったという言い方であろう。子供まで招待したというのは、隣どうしだったからで、王十五は杜甫の家族のことをよく知っていたのだらう。と同時に王十五が、子供好きだったことも暗に示している。

ここは子供を招待したのではなく、食べきれなかった分を王十五が杜甫に持って帰らせたと解する読み方も、南宋の古い時代からある。ここでは明清の代表的な注釈書によって、子供まで招待してもらったと解釈しておいたが、いずれにせよ、今回、王十五の招待を感謝するにあたって、この最後の句は、必ず書き込まねばならなかったに違いない。

自分は病の身であったため、せっかくのすばらしい料理も、残念ながら意味のないことになってしまったけれど、そのかわり、子供らにとっては、こんなおいしい料理を腹いっぱい食べることができ、この上なく幸せなことだった、という対句的な言い回しは、人情の機微に触れた温かい言い方である。これは作者が、人と人との思いやりで満ちた心のあやを、うまく言葉で表現しうる詩人だったからに相違ない。

## 四 夜明けより 昼まで座りて きみの使い 待つ

[1841] 崔評事弟許相迎不到。應慮老夫見泥雨怯出、必愆佳期。走筆戲簡]

前の詩と同じころの作。場所は詩中に「江閣」とあるので、白帝山の西側斜面の、長江を眼下に見おろす場所にあつた宿舎であろう。杜甫は他の詩では、しばしば「西閣」とも呼んでいる。

詩題にいう崔評事弟という人物は、杜甫の母（崔氏）の兄弟の子、即ち母方の年下にあたるいところである。[538] 毒熱寄簡崔評事十六弟の詩にいう崔評事十六弟のこと。中央で、司法機関の末端の官である大理評事であつたのが、その肩書きのまま、使者として夔州に来ていたか、夔州の長官の幕僚として赴任していたかである。ただし本当の従弟というよりも、遠縁の従弟すじにあたる人物かもしれない。杜甫は遠縁のものを、近い親戚のように言いなすことがよくあるからである。

詩題に「戯れに簡おくる」とあるように、冗談めかして作った所謂戯題詩である。戯題詩は六世紀、南朝の梁陳の時代に、純粹に戯作的なものとして始まる。唐になると、徐々に著名な詩人たちによつて作られていき、その中で一つの画期を作つたのが杜甫の戯題詩である。詩題に「戯」の字があるものを勘定していくと、それまで一人一、二首だつたものが、王維で八首となり、杜甫に至つて突然二十二首となる。（連作詩は一首に数える。）唐代すべてで三百二十九首あり、白居易が七十七首で突出するが、その次に多いのが杜甫である。

杜甫の戯題詩は、それまでの遊び半分的な戯題詩を、内容のあるものに変えている。本当に吐露したい真情があり、それをあからさまに言うのがはばかられる、または直接相手に言えは角が立つ、そういう時、戯れというポーズをとりながら、本心を言ってしまうのである。また戯れの表現を作り上げる技巧も、相当に磨き上げられている。

何十万年という人類史の中で、人間の脳は集団生活をおくる過程で発展していったと言われる。集団と自分との関係、他の人たちどうしの関係がどうなのか、それとの自分の関係をどう取ればよいか、そういうことを常に判断する中で、脳も発展してきたと言われる。もしそうなら、それをヒントにすれば、杜甫の戯題詩も、複雑な人間関係の中で、生じた摩擦をスムーズに解消し、人間関係をうまく営んでいくために、大きな役割を果たし、そういう中で、内容と技巧を發展させていったのだと言えないだろうか。

崔評事弟許相迎不到。應慮老夫見泥雨、怯出、必愆佳期。走筆戲簡。

崔評事弟が相い迎うるを許すも到らず。応に慮るなるべし、老夫泥雨を見て出ざるを怯れ、  
必ず佳期を愆ると。筆を走らせ 戯れに簡す

江閣邀賓許馬迎、

江閣賓を邀うるに 馬迎を許す

午時起坐自天明。  
 午時に起坐するは 天明自りす  
 浮雲不負青春色、  
 浮雲 負かず 青春の色  
 細雨何孤白帝城。  
 細雨 何ぞ孤かん 白帝城  
 身過花間露濕好、  
 身 花間を過ぎ 露湿するも好し  
 醉於馬上往來輕。  
 馬上に酔うて 往來するも輕し  
 虛疑皓首衝泥怯、  
 虚しく疑う 皓首の衝泥するを怯るるか  
 實少銀鞍傍險行。  
 實に少く 銀鞍の 險に傍いて行くを

弟すじの崔評事どのが、相を迎えくるを 許るも到らず。老夫のわれ 泥となれるつよき雨を見て出ざるを怯れ、  
 必ずやこの佳き期を愆えりと、かれは応に慮るなるべし。いそぎ筆を走らせ 戯れにこの簡をか  
 江ばたの 閣に 賓のわれ邀えんと きみは馬の迎え よこすを許りたり  
 午時まで とこより起きて坐りまつこと けさの天の 明けしとき自り なしいたる  
 浮雲の そらをおおうも われは負かじ 青いちめんの 春色 めずるちかいに  
 細やかな 雨ふるとも われは 何ぞ孤かんや 白帝城の きみがまねきに  
 わが身 花の間を 過ぎゆくとき 露れて湿るも また好からん  
 馬の上 さげに酔うての まわりみち 往き来するのも 軽やかならん  
 きみは虚しく疑わん 皓き首と なりぬるわれの 泥を衝きてくるを 怯るるか  
 こちらは實に銀の鞍 ただ少くのみ あめのなか 険みちに 傍うて行かんとするに

「遠縁の弟すじにあたる檢察官の崔殿が、わたしに馬の迎えを、寄こすからと約束したのに、なかなかやつて来ない。あいにく道をぬかるませるような激しい雨となり、老夫のわたしが恐れをなして、今日のおき約束を反故にしたに違いないと、きつとかれは気を回しているに相違ない。しかしわたしが行けないのは雨が恐いからではなく、馬が来ないからなのだ。そこでわたしは誤解を解くために、急ぎ筆をとって手紙がわりに、この戯れの詩を書いて送ることにした」

長江沿いの楼閣に、仮住まいしているわたしを、きみは賓客として招待し、迎えのための馬を、寄こそうと約束した。それでわたしは夜明からずっと、きみの使いを待って坐っていたのに、もう昼時になった。

たとえ雲が浮かび出て空をおおいつくしたとしても、青々と美しいこの春景色を、一緒にめでようというきみの約束に、わたしは背いたりしない。また、春のこぬか雨が少々降ったからといって、白帝城からのきみの招待を、反故にしたりもしない。だから必ず出かけるつもりでいる。花の間を通過して宴におもむく時、服が濡れたりしたら、それはそれでなんと風流なことだろう。宴が果て酔っぱらって、また馬の背に乗って家に帰っていけば、きつとそれは軽やかな帰路となるであろう。

この白髪の老人が泥濘の道を、出かけようとするのを恐がっていると、もしもきみが疑っているとしたら、それは意味のないこと。ぬかるみの危険な道に沿って出かけようとしても、きみが寄こしてくれるはずの、りっぱな馬がなかなか来ないから、それできみの所に到着していないだけなのだから。

\* \* \*

戯れの社交の詩である。たくみな言葉づかいで相手の誤解を解き、同時に相手の約束違反も暗に諷して、ユーモアに富み、愉快な詩となっている。

二句めが読みづらいが、それは倒置されているからである。散文風の普通の語順になおせば「天明目り起坐して午時に至る（自天明起坐而至午時）」であろう。わざわざ倒置にしたのは、脚韻をそろえるためであろうが、坐って待っているのは夜明けからずつとだ、という意味を強調したかったためであろう。杜甫は今日の宴会のため、ずいぶん朝早くから起き出して、身なりを整えていたに違いない。そしていつ出迎えが来ても、すぐ出かけられるようにと、そのまま長いあいだ坐りつづけて待っていた。ひとつの私的な宴席のために、そこまで真剣に待ち続ける杜甫の姿は、なんとも滑稽である。そういう自画像を描き出そうとしているのだろうが、しかしもともと杜甫には、そんな融通の利かない生真面目さ、一途なところもあった。

九年前、長安でまだ左拾遺の任に就いていたころ、杜甫は翌朝早く、密封した意見書を天子に差し出すという、大事な仕事をひかえていた。そのとき彼はひと晩眠らず、宮殿の大門は開いたろうか、高官たちは馬で参内しはじめたろうか、などと心をくだき、夜が明けたかどうかを、何度か係の者にたずねている。「0603「春のひに ちようていの左の省に宿す」の詩に、

よどおし寝ねず あげがたの おおもんひらくかと 金の鑰おと 聴す 不寝聽金鑰、

てんじようびとの うまの おもがい玉珂 ひびきこぬかと風を因りに想いをめぐらす 因風想玉珂。

朝明けぬれば 封してひめたる事がらの みかどにさしださんとて わがふところに有り 明朝有封事、

かかりのものに 数しば問う 夜は あけしやいなや はた如何と 數問夜如何。

杜甫が、小事から大事に至るまで、不器用なほどまでに真面目な態度で臨んでいたことがわかる。

さて、この詩は、起聯で、お迎えが来るといことだったので、朝から待ってましたと、自分には非がないことを述べ、結聯で、わたしが行けないのは馬の迎えが来ないからで、わたしが泥濘におじ気ついているからではありませんよと、誤解を解こうとしている。起聯と結聯だけで、この詩の本来の用は足りている。



の意味をいかにたくみに作り上げているか、その詩作りの困難さ、その一端を、わたしはここで示したかった。当時、杜甫の詩が江南でもてはやされたと言われるのは、このような技巧にたけた、戯れの詩であったと思われる。

## 五 夢より覚めきて また夢のなかへと 引き入れらる

[1843「晝夢」]

前の詩と同じく大暦二年の作で、五十六歳である。詩中に二月とあるが、この年の二月は、西暦では七六七年三月五日から四月三日にあたる。同時期の杜甫の他の詩によれば、夔州は日本よりはずっと暑いようである。

杜甫はこの詩で昼寝をし、さらに夢を見ている。昼寝といえは『論語』に、弟子の宰予が寢室で昼寝して、孔子からひどく非難された話が有名である。「朽ちたる木は彫るべからず、糞土の牆は朽るべからず」と叱られ、教育しようにも、手のほどこしような人間だと言われた。たしかに儒教側からすれば、昼寝にはこういう怠惰さを非難されてしまう罪悪感の響きがある。

しかし老荘的な発想では必ずしもそうではない。怠惰な眠りはマイナスだけのイメージでは無く、むしろ自分を無用なものとして、世俗の価値観の外に置く、隠遁者が標榜する立場でもある。杜甫は官を棄てたという点で、隠遁者として考えることができるし、杜甫自身も自分を、隠者になぞらえることがしばしばある。次の詩では、世俗社会での功利や名声の可能性などを、みな捨て去るという代価を払ったうえで、隠遁者の謂わば特権、あるいはその態度表明としての、怠惰な眠りを意味している。

### 晝夢

晝夢

二月饒睡昏昏然、

二月 にがつ 睡り饒く ねむりおほく 昏昏然たり こんこんぜん

不獨夜短晝分眠。

独り ひと 夜短のみならず やたんのみならず 昼分も眠る ちゆうぶんもねむる

桃花氣暖眼自醉、

桃花 とうか 氣暖かにして きあたかにして 眼 め 自ら酔い おのずかよ

春渚日落夢相牽。

春渚 しゆんしよ 日落ちて ひるおちて 夢相牽 ゆめあひひ

故鄉門巷荆棘底、

故郷の門巷 こきやうもんきやう 荆棘の底 けいげきのかぞ

中原君臣豺虎邊

中原の君臣 ちゆうげんきんしん 豺虎の邊 さいこへん

安得務農息戰鬪、

安んぞ得ん いずくえ 農に務めて のうにつと 戰鬪を息め せんとうをや

普天無吏橫索錢。

普天のもと ふてん 吏の り 錢を橫索すること せんをおうさくすること 無きを な

昼ひるに 夢ゆめみる  
 二月にがつのころおい 睡いねむり饒おほく あたまのなかは昏こん昏こん然ぜんと うすぐらし  
 独ただに 夜よなかの 短みじかきときのみならず 昼ひる分まにも また眠ねむる  
 桃ももの花はな すでにひらきて 気きは暖あたたかに 眼めは自おのずから 醉ようがごとく  
 春はるの渚なぎさに日ひは落おちて 夢ゆめよりさむれど ゆめはなお 相われを牽ひきいれんとす  
 ゆめのなか 故郷ふるさとの 門もんや巷ちまたは おいしげる 荆いばらや棘とげの 底そこにあり  
 中原ちゅうげんの 君みかども 臣おみも 豺おおかみや虎とらのごとき わるものの辺あたりにぞ くるしみませる  
 安やすんぞ得えん ひとびとみな 農のうに 務つとめはげみて 戦いくさ闘たたかを息やめ  
 普あまねくおおう天てんのもと した吏やくにんの 横よこ たみより銭ぜにを 索しほりること 無なきを

「昼間にも眠って夢をみる」

仲春二月（新暦では三月）のこの時期は、やたら眠くて、居眠りすることが多く、頭のなかは薄暗くぼんやりしている。春分を過ぎ、夜が急に短くなったため、短い夜はもちろんのこと、昼のあいだもまた眠っている。

桃の花がひらき、その香りをのせた空気はあたたかく、わたしの眼はおのずと酒に酔っぱらったように、再びまぶたが重なっていく。春のあたかげな岸辺に日が落ちて、ようやく昼寝の夢から目覚めてきたのに、また夢路へと引きこまれていく。

夢のなかで見た故郷のわが家や近隣は、荒れ果てて生い茂ったいばらの中に埋もれていた。洛陽、長安を中心に中原一帯では、天子や臣下たちは、いまだに狼や虎のように凶暴な逆賊たちの近辺で、彼らの悪事に悩まされておいでだった。

この二月は農作業が始まる時期。なんとかして、国中が戦争をやめて農業の大本につとめ、あまねく天がおおうこの世で、下役人が勝手気ままに、人民から雑多な金銭をむしり取ることなどが、ないようになってほしい。

\*

\*

昼寝の夢を詠じた詩である。

一、二句めは、詩題を敷衍して、仲春二月はどのように眠くて、居眠りが多くなるのか、その状況を補足説明している。三、四句めは、さらにそれを承けて、自然と眠りに誘われ、覚めてもまた、夢の中に引き戻されることを述べる。「夢相ゆめあひい牽ひく」という言い方には、寝覚めても、そのままずると不可抗力に、夢の中へ引き込まれていく状態が、よく表わされている。夢を思い出そうとしているのではなく、為されるがまま、完全に受け身の状態という言い方によって、この夢が、無気力で怠惰な眠りであることを、よく表している。杜甫は正規の官に就かず、半ば隠遁の状態だから、こんなことが可能なのであり、この前半四句は、自分がそういう状態であることを自ずと表明している。

五、六句めは、話題が転じて夢の中である。荒廢した故郷の姿と、今なお逆賊に苦しめられる君臣たちの姿が示される。この二つをいつも気にかけているから、夢にも現れたと解したい。

七、八句めは、そんな故郷や故国を見て、戦争がなくなり、農民が安心して農業に精を出し、下役人から金銭をむしり取られることが無いようにと、願いを述べる。

七句めの、農業に専念することができるようになって欲しい、との願いは、杜甫は昔から抱き続けている。中国は古代より農業を大本とする国だから、農業に務めよ、農業を重んぜよという重農主義、農本思想の主張は、行政の方針として為政者側から当然なされる。たとえば唐代でいえば、太宗が息子（後の高宗）に、帝王の模範として与えた『帝範』や、太宗の言行録とでも言うべき『貞觀政要』には、「務農」「務農を論ず」の、独立した編目が設けられている。また重農、農本の思想は儒教の考え方でもある。しかしこの詩での杜甫の農業重視は、為政者のような富国強兵とも、また儒教思想のような「重農輕商」（農業を重んじて商業を軽んじる）とも、微妙に立場が違う。弱い農民側の立場に立ち、農民たちが生業にはげみ、まともに生活できるようになること、そのことをつよく願っている。

また『戦鬪を息めよ』との主張は、古くは儒教にも老莊思想にも存在し、中国古代思想の一つの潮流とさえいってよい。しかし、戦争をやめて、農に務めることができるようになって欲しいと、二つの願いを同時に主張するのは、決して多くはない。

八句めは、三つ目の願いを述べる。これは、朝廷がみだりに税金を農民から徴収するな、という意味ではあるまい。そういう主張は、当然杜甫には強くある。しかしここはそれとは違う。ここで言う「吏」は胥吏（下役人）であって、科擧の試験を合格してきたような、朝廷が直接任命する「官」ではない。中央で任命され、地方に派遣される官僚は、二、三年で次々と転動していく。だから方言差の激しい中国では、現地の農民と官僚は会話も通じないし、官僚は末端の事務手続きにうとく、直接の交流はほとんど無かったであろう。その官僚と現地の農民との間に介在して、様々な事務処理をしていくのが胥吏と呼ばれる者たちである。彼らは現地の民間から採用され、現地の方言を話し、諸般の事務にたけている。しかし朝廷からは給与が出ないので、民から手数料や賄賂を取り、ピンハネもした。それは、お上から課せられる正規の租庸調や雑徭の義務とは別枠で、結局はこれが、農民たちをいつそう苦しめることになっていた。

杜甫がここで問題にしているのは、この胥吏が、農民から好き放題に金銭をもぎ取る実態である。唐代前半、杜甫の時代には、胥吏の弊害を説く者はまだ多くないように見える。地方政治に巣くう胥吏の弊害は、唐代後半から宋以後によく顕著になっていく。現地採用の胥吏の制度は、科擧制度と一体になった中央集権的な官僚制度を、裏から支える必要悪の制度として、清朝まで機能し続けた。中国の官僚政治が、その実態は胥吏政治といわれる所以である。

三年前、杜甫がまだ成都にいたとき、韋諷という人物が、閬州というあまり大きくない州の、録事参軍として赴任することになった。そのとき、地方の中級官僚となる韋諷に、杜甫が期待したのは、州民からさまざまな名目で金銭を強奪する胥吏、杜甫はそれを州政治の害虫と呼んでいるが、その弊害を取り除くようにということであった（「336」送韋諷上閬州録事参軍）。杜甫の批判は、相当に先見的といえる。

しかしこの胥吏の弊害批判も含めて、農に務めよ、戦いを止めよは、みな反王朝、反体制の思想などではない。謂わば朝廷が公認する思想といっ

てよい。しかし公認の思想も、このように三つを同時に主張すると、きわめて先鋭な一つの立場となる。また杜甫の驚くべきところは、これほど大きな意見を、八行の律詩の中で、平然と言つてのけることである。

個人から出発して社会全体に向かう構造が、この詩でも確認できる。昼間から居眠りする、いかにも懶惰な自分の状態から出発して、夢の中に荒廢した故郷や戦乱の国家を見、国家の弊害を取り除き、農民の生活を安堵したいと願う。この急展開、前半と後半の極端な断絶には、不思議なことにまったく不自然さを感じさせない。杜甫の詩が余人を寄せ付けない、と言われる所以であろう。

## 六 なんじが顔 見れば わが病も 消えうせん

〔1855〕得舍弟觀書。自中都已達江陵、今茲暮春月末、行李合到夔州。悲喜相兼、團圓可待。賦詩即事、情見乎詞〕

大曆二年(七六七)の春、杜甫五十六歳。詩中に、朝な朝なに岸辺の樓に登るとあり、それをそのまま事実と受け取れば、おそらくは瀘西に引越す前の、白帝城の西閣か赤甲山の山麓の家であろう。

杜甫には、六人のきょうだいがいて二番目である。長兄は早くに亡くなったので、実際は杜甫が長兄である。杜甫の下には、杜穎・杜観・杜豊・杜占の四人の弟と一人の妹がいた。当時の家父長制から言うと、父亡きあと弟や妹に対しては、長兄である杜甫が、法的にも家長の役割を果たさなければならなかった。弟や妹を想う杜甫の詩には、きょうだい愛や父性愛のほか、家長としての責任感の側面も見出すことができる。

弟の杜観の名が、杜甫の詩に現れるようになるのは、この夔州期になってからである。それ以前は杜観は、山東にいた。〔1852〕わが舍の穎が齊州に赴くを送る、三首〕其三の詩に「兩りの弟は亦た山東にあり」とあり、二人の弟とは杜観、杜豊のことと考えられている。

ここで取り上げる詩から、杜観は大曆二年の春には、長安方面から江陵に着いていたらしいこと、さらに三月末までには、江陵から三峡をさかのぼって、夔州まで来る予定だったこと、などがわかる。また、ほぼ同時の作である〔1855〕観の即に来るを喜び、復たこの短篇を題す、二首〕其二には、「心はこの十年の事を論ずべし」とあり、杜甫と杜観は、杜甫が秦州に旅だつて以来、十年近く会っていないことがわかる。

このたび、杜観が夔州に来たのは、自分の結婚準備のためであり、家長である杜甫と、婚事について相談する必要があるからであろう。この夏に作られた〔1855〕わが舍の弟の観、藍田に帰りにて新婦を迎う、われ み送りにてこのうたを示す、二首〕其一の詩には、

いま 汝 こころより去りて 妻子を迎えゆく

汝去迎妻子、

てん高き秋には ふたたび 却り回らんことを 念うなり

高秋念卻回。

即今は 螢の 已に乱れとぶ なつのさかりなり

即今螢已亂、

好や なんじ わたりどりの雁と同じく あきには このちにもどり来たれよ

好與雁同來。

とある。

その後、杜観は妻を娶りに、夔州から長安南の藍田に行った。冬には、藍田から真つ直ぐ江陵(荊州)に到着した。同年の冬の作〔1853〕わ

が舎の弟の観が藍田に赴き、妻子を取りて江陵に到る、喜びてこのうたを寄せおくる、三首「其一の詩に  
汝すでに 妻子を迎えて 荊州に達せり  
その消息は 真にわれに伝わりきて 我が憂いを解く  
とある。  
汝迎妻子達荊州、  
消息真傳解我憂。」

さらに杜甫は、自分も杜観のいる江陵に下り、そこでみな大家族として、一緒に住みたいという計画を持っていた。ただ、それはその後の杜甫の伝記が示しているように、部分的にししか実現されなかつた。

得舎弟観書、自中都已達江陵、今茲暮春月末、行李合到夔州。悲喜相兼、團圓可待。賦詩即事、情見乎詞。

舎弟観の書を得るに、中都自り已に江陵に達し、今茲の暮春月末、行李合に夔州に到るべし。

悲喜相い兼ね、團円待つべし。詩を賦し事に即く、情は詞に見ゆ

爾過江陵府、

何時到峽州。

亂離生有別、

聚集病應瘳。

颯颯開啼眼、

朝朝上水樓。

老身須付託、

白骨更何憂。

爾 江陵の府を過ぐ と

何時か 峽州に到らん

亂離には 生きて別れること有るも

聚集すれば 病応に瘳ゆべし

颯颯として 啼眼を開き

朝朝に 水樓に上る

老身 須く付託すべし

白骨 更に何をか憂えん

舎の弟の観の書を得たるに、ふねは中つ都自り已に江陵に達し、今の茲の暮れなんとする春の月末には 行李た

るおとうとは 合に夔州に到るべし。わが悲しみも喜びも みな相い兼ねあわせ、なんじと團円まること ひた

すら待つべし。この詩を賦いつくつて めのまえの事からに即く、わが情は詞のうえに見れたり

爾すでに 江陵の府に 過るとぞいう

何時か峽の この州に ふねは到らん

よは乱れ ひとつも 離ればなれるときなれば 生きながら 別れることのつねに有り

なんじと聚つどい 集あつまれば わが病やまい 応まさにかならず 瘳いゆるべし  
 颯さつ颯さつと まばたきしつ つ 啼なきはらす 眼まなこのおおきく み開ひらきて  
 朝あさな朝あさなに なんじは こぬかと 水みづべの楼たかどの われは上のぼる  
 老おいたるこの身み 須すべく なんじに付さけて 託まかすべし  
 わがみはくちて 白はっこ骨こつとなれど このうえ更さらに 何なにをか憂うれえん

「わが実弟の観からの手紙をうけとった。それによると中央のみやこ長安から、すでに長江中流の江陵に到達し、今年の暮春三月の月末には、旅人であるお前は夔州に到着するであろうとのこと。悲しいことも喜ばしいことも、みな兼ねあわせて、一家団欒することがひたすら待ちのぞまれる。この目下の事柄についてこの詩を作ったのだが、わたしの心情は、この詩の言葉に表れている。」

お前はもうすでに長江中流の拠点都市の江陵府を通過したという。お前の乗った船は、この険しい峡谷の夔州の町に、いつやってくるのか。うちつづく戦乱で、人々が離散するこんな世の中では、生き別れにならないことが、往々にしてある。わたしのこの病は、お前と一緒につどうことができるとなると、きつとよくなるであろう。

わたしは、ぱしゃぱしゃとまばたきしながら、泣きはらした眼を大きく見開いて、お前の船はまだ来ぬかと、まいあさ長江の岸辺の高い建物にのぼっている。

老いさらばえた我が身は、後事をすべてお前に託す必要がある。お前がいさえすれば、やがて死んで白骨となったあとも、このうえ何を心配することがあろうか。

\* \*  
 弟を想った詩である。

詩題を読むだけで歌の背景がよくわかる。杜甫が手紙をもらって一番嬉しかったことは、弟がもう江陵に到着したこと。その一番嬉しい事実を、詩の冒頭におく。手紙を読んで「お前はもう江陵まで来たのなら、いったい、いつこちらに来るんだ？」と訊ねたくなるのが、人の情というものだろう。自然に湧き上がる疑問、その心の動きが口を突いて出て、そのまま詩となった形である。

病気がちの杜甫は、一年前まで、旅の途中で、半年近くも寝たり起きたりの生活だった。大暦二年のこの時期も、身体の不調はあちこちある。弟の杜観とはもう十年近くも会っていない。そんな弟が、いまだ戦乱の打ち続くなか、私に会いに来るのだ。彼の顔を見たら、病気なんかいっぺんに消え失せてしまうであろう、と三、四句めは歌う。

顔を見ただけで病気が失せると言うのは、今日の我々からすると、いかにも誇張に聞こえる。しかし社会のスピードが増し、あらゆるものがデジタル化しつつある今日と違って、千三百年前の杜甫の生きた時代は、人々の感情はもつと深く、一途なところがあつたであろう。そう考えると

き、杜甫のこの言い方は、決して大袈裟ではなく、正直な思いそのものではなかったか。

五、六句め。なつかしき弟、今日は来ぬかと、涙でぬれた眼を見ひらいて、毎朝毎朝、岸辺の高樓にのぼって、沖を見つめる。まるで「岸壁の母」そのものである。一読しただけで杜甫の姿が、ありありと目に浮かぶ。この句の持つ、イメージ喚起力は強烈である。

とくにこの時代、家族の離散や生き別れは日常茶飯で、したがってまた感激的な再会などというのも少なくなかったであろう。杜甫は弟の杜観を待ちあぐねて、毎日樓に登っているのだが、杜甫と同じような姿が、あちこちで見かけられたに違いない。そこに、この詩がどんな前提も必要とせず、誰にでも共感できる土台があるのだと思う。

最後の七、八句め。ここには杜甫の不安や希望が赤裸々に吐露されている。これで身後を弟にまかせたならば、もう白骨となった後も、なにも心配は無い、と歌う。ということは、裏を返せば、このまま異郷で自分がお仕舞いになつたらどうなるのか、という大きな不安があったことを意味している。この時、杜甫の二人の息子は、十八歳と十五歳ぐらいであった。老後の心配、我が亡きあとの気がかり、これもまた、いつの世も変わらぬ、どの親にも共通する思いである。

この詩を理解するには、時代背景や文学史の知識など、とくに必要としない。歌われている中味は、なにか運命に選ばれた特別な人の、劇的で特殊な感情などではなく、われわれのすぐ傍にいる、市井の人々の、日常の感情そのものである。杜甫が詩で述べているのは、大暦二年の暮春、弟の杜観が、江陵から長江を遡って夔州の地に到着するのを、五十六歳の杜甫が待つという、時も、地も、人も定まった具体的なものである。その具体性があるからこそ、真実の中味のある詩となっており、普遍性はその充実した中味から発している。もちろんこれとは逆に、具体性をそぎ落とした抽象から、普遍性に到達する詩もある。しかし杜甫にはこの詩のように、個別性から普遍性を勝ち取るパターンが多い。

この詩は、肺腑からほとばしり出たような、率直な表現を次々にたたみかけ、我々に鮮烈なイメージを呼び起こす、と同時に強い感情の余韻を残す。説明がなければ理解しにくい、短詩形の漢詩が多いなか、この詩はこれだけで単品として、十分にひとり歩きできる力を持っている。そういう意味で、わたしは杜甫詩の名作の一つに数え上げてよいと思う。しかしこの詩は、歴代の代表的な選集等には収録されていない。今まで、人々に好まれて読まれた形跡がないのである。詩に対する考え方が、過去の中国の伝統社会の士大夫たちと現代とは、かくも違うものかと痛感する。

## 七 りんご園より 少年至る

[1902\_醫子至]

大暦二年(七六七)の晩春、杜甫は白帝山(城)の西側から、東側へと居を移した。[1916\_雨に阻まれ瀼西の甘林に帰るを得ず]の詩に「瀼西の宅に帰らんと欲す」の句があることから、ここではその居宅を、瀼西宅と呼ぶことにする。瀼西宅は、今の草堂河(東瀼水)と、今の子陽山(唐代の赤甲山)の、東南の山裾にはさまれたところにあった(簡錦松氏の説による)。白帝山からは、地図上の直線距離で東に三キロメートル弱のところにある。草堂河は長江の小さな支流で、白帝山の南端部で長江に流入する。増水期には、白帝山から直接草堂河を船で遡って、瀼西

宅へ行くこともできた。

この漢西宅には、家の裏山に四十畝（約二ヘクタール）の果樹園が付属していた。杜甫は最初は賃借りしていたが、後には果樹園もろとも買上げた。最後に、この三峡の町の夔州を去るときには、南卿兄という人に贈与していった。それは「1890」暮春に、漢西の、新たに賃がりせし草ぶきの屋にことよせて、このうたを題く、五首」や「1927」将に巫峡に別れさらんとして、南卿兄に、漢西の果園四十畝を贈る」等々の詩からわかる。杜甫はこの漢西宅に、翌年の大暦三年の正月まで、およそ十ヶ月ほど住むことになる。（ただし稲田の収穫期には、草堂河のもう一つ上流の東屯に、しばらく移り住んだ。）杜甫はこの漢西宅を拠点に、蜜柑園や稲田を管理経営し、野菜を作ることになる。

この漢西宅の果樹園には、多くの蜜柑の木が植えられていた。杜甫はそこを柑林とも呼んでいる。しかし蜜柑以外にも、いろいろな果樹が植えられていたことは、次の詩にあるとおりである。

豎子至

豎子至る

檀梨纒綴碧、

檀梨 纒かに碧を綴り

梅杏半傳黃。

梅杏 半ば黄を伝う

小子幽園至、

小子 幽園より至り

輕籠熟奈香。

輕籠に 熟奈 香し

山風猶滿把、

山風 猶お把に満ち

野露及新嘗。

野露 新を嘗むるに及ぶ

敲枕江湖客、

枕を敲つ 江湖の客

提携日月長。

提携して 日月長からんことを

子の豎 わがやへ至る

檀と 梨のかじつ 纒かに 碧のいろを 綴りあわせ

梅と杏 その半ばは 黄いろとなれるを そとに伝う

小子のしもべ 幽き やまの園より わがやに至り

輕きたけ籠 たずさえきて なかには 熟るる奈の におい香し

山にふく 風のなごり いま猶お りんご把れば てのひらに満ち

野におく あさ露つゆ この新あたららしきもの 嘗なむれば くちのなかにぞ 及びおよくる  
 枕まくらに欝もたれ やまいにふせ 江湖いなかにさすらう 客たむびとのわれ  
 なんじ わがてを 提ひきまた携たずさえ かくて日月つきひの 長ながからんことを

「少年の使用人がわたしの所へやってきた」

草木瓜くさぼけの実と梨の実は、いまようやく果皮の表面が、緑の色を綴り合わせたように、成長しはじめている。また梅と杏あんずの実は、もう半分ぐらいは、黄色に色づいている。

使用人の少年が、人里離れ、遠いところにある果樹園からやってきた。軽々とした竹籠を、手にひっさげてやってきた。そのなかから、熟したリンゴの香りがただよってくる。

リンゴを手にとると、果樹園に吹きつける山の風の余韻が、いまなお充ち満ちている。この初物を味わおうとすると、野原に降りた朝露のしたたりが、口の中に入ってくる。

わたしは、いつも枕にもたれかかって病気がちで、朝廷を去って、こんな田舎に漂泊している旅人の身である。今までお前が、わたしをあれこれ助けてくれたように、これからもずっと長くそうであってくれと願う。

\* \* \*

使用人の少年が、果樹園からリンゴを持って来てくれたことを詠じた詩。

わたしの好きな詩の一つであるが、この詩を読めば、なぜいつも心がなごむのだろう。

まず詩題の「少年至る」という言い方に、不意の来訪者を作者が、驚き喜んでる様子がうかがえて、読者にもその高揚感が伝わってくる。杜甫には「賓まろうど至る」「客至る」と題する詩があるが、いずれも客の訪問を喜んでいる。

また冒頭二句から、初夏の初々しい果実が四つも出てきて、フレッシュな感じを与える。草木瓜と梨は、わずかに「碧を綴りあわせ」、梅と杏は、半ばは「黄いろになったのを伝え」ている。この「綴碧」と「伝黄」の言い方は、いったいどんな様子なのだろうか、読者の想像をかき立て、読めば読むほどに味わい深い。平易な言葉ながら、誰にでも書けそうで書けないのではないか。

この冒頭の二句は、どんな状況下で作られたと考えたらよいのだろう。杜甫は家にいるから、果樹園の様子はわからない。だからまずは、家に居ながら、勝手に想像して書いたと思いたい。一方、これは山の果樹園ではなく、家の庭や周辺に植わる果樹の様子で、それを杜甫が実際に見て描いているのかもしれない。でも、リンゴを持ってきた少年が、果樹園の様子を報告したことを、杜甫が詩にしたとも考えたくない。もっと少年びいきになれば、こんな詩的な言葉が少年の口から突いて出た、それを杜甫は書き取った、とさえ考えたくない。ここに描かれた、清らかな心を持った、潑刺とした少年を想像すれば、そんな風にさえ思いたくなる。

しかしこの二句は、むしろ映画の冒頭シーンを、考えるのがいいのかもしれない。タイトルの文字が、背景の山の画面にゆっくり溶けあいつつ消えたあと、物語の出だしは初夏の緑の果樹園から始まる。色とりどりの果木が実をつけている。カメラは草木瓜、梨、梅、杏に近づき、「綴碧」や「伝黄」の様子が映し出される。場面が切り替わって、少年が何か手に持って、山道を急いでいる。次のシーンでは、竹籠がクローズアップされ、そばで杜甫がリンゴの香りをかいでいる。そんなシーンの移りかわりである。

そのように映画風に詩を解したとき、最初のあれやこれやの穿鑿は、無意味だったのではないかと思えてくる。しかし、そういう想像の営為を積み重ねることによっても、詩は多様に読まれていく可能性が広がっていく。というより、詩を読むときに、あれは間違った想像とか、これは無意味な解釈とか、排除する必要はないであろう。それらは、みな詩を深めていくための下作業となるから、という意味であるよりは、もっとそうした誤解やら見当外れやらを含めて、詩を想像している、そのいつときの時間を楽しんでいるのだから。詩を読む醍醐味の一つは、しばし現実を離れ、自由に想像力を羽ばたかせる空間に遊ぶことだろうから。

五、六句もまた、冒頭にまさるとも劣らぬ、すがすがしい表現である。リンゴをつかむと、リンゴ畑の山風が手に吹くようで、初物のリンゴをかぶりつくと山野の露が口に入ってくる。気のきいた、風趣ある表現だ。山の風や野の露が、初夏にふさわしくみずみずしい。もぎたてを、果樹園からそのまま包み込んで届けたような、新鮮さに満ちている。どこかの果樹園の宣伝文句にでも、掲げたいような一文ではないか。

杜甫は初物のリンゴをもらって感激し、それでこの詩を書いたのだが、さらにリンゴを届けてくれた使用人の少年に、今後もずっとわたしを助けてくれるように、と願っている。この少年は、杜甫の家で雇われていた阿段という名の下僕である。賤民として卑しめられていた異民族の猿族出身で、夔州期の杜甫の詩に何度か登場する。前稿の「[1506]猿奴の阿段に示す」でも出てきたように、杜甫の私生活を様々な面で助けている。杜甫はこんな使用人の少年に感謝しているのであり、この分け隔てをしない杜甫のやさしい気持ちに触れると、読者の心もおのずと解かれ、あたたかくなってくる。

初夏の果樹園から、もぎ取られてきたばかりの、おいしそうな果物、そのいきいきとした描写、少年の純な気持ち、杜甫のやさしいころね、これらに接してわたしの心も嬉しくなるのかなと思う。

## 八 ひしおの作り方 妻に報ぜん

[2019]孟倉曹歩趾、領新酒醬二物滿器、見遺老夫

官を辞めてより後の杜甫の経済生活は、縁者や交友関係の好意に頼っていただけではなく、自分でもある程度生活の資を稼いでいた。葉草売りは、長安での就職浪人時代から晩年に至るまでやっていたし、家禽類の飼育は、成都草堂期と夔州で行った。夔州では蜜柑、稲作、野菜などの農業経営を一サイクルではあったが実践している。この他にも、家庭教師とまでは行かないが、詩を教えるなどして、その報酬を若干の生計の足しにしていた、と私は考えている。その形跡は、杜甫の生涯を通じて、あちこちの詩に断片的に見える。

大曆二年（七六七）、の秋、杜甫の瀘西の居宅のすぐ近くに、孟兄弟とその母親が引越してきた。兄の孟倉曹が、十月に洛陽での官吏登用試

験を受けるので、その指導を杜甫に受けるためだったと思われる。杜甫はかつては、詩文の才が必要とされる中央の左拾遺の官であったし、今も夔州長官のために、文書を代作したりもしている。杜甫から受験の指導を受けるために、孟氏一家が隣に引越して来たとしても、少しも不思議ではない。ひと秋の短い付き合いではあったが、杜甫は、勤勉かつ親孝行で、勉強熱心な孟兄弟との交流を、忘年の交わりだと述べている。孟氏が洛陽へ出発するに当たって、杜甫は孟氏に手紙を託し、自分の洛陽の莊園がどうなっているか、様子を見てきてくれと頼んでいる。杜甫は孟氏をかなり信頼していたものと思われる。

次の詩で、孟氏が酒とひしおを杜甫に持って来たのは、先生に教えを乞う時、学生が最初にたずさえて来る所謂「束脩」とは、また別個の、お礼の一つかもしれない。

孟倉曹步趾、領新酒醬二物滿器、見遺老夫

孟倉曹 步趾し、新酒醬の二物 器に満たせるを領して、老夫に遺らる

楚岸通秋屐、

楚岸 秋屐通じ

胡床面夕畦。

胡床 夕畦に面す

籍糟分汁滓、

籍糟 汁滓を分かち

甕醬落提攜。

甕醬 提携より落つ

飯糲添香味、

飯糲には 香味を添え

朋來有醉泥。

朋來たらば 醉泥すること有らん

理生那免俗、

理生 那俗を免れん

方法報山妻。

方法 山妻に報ぜん

倉曹のやくめの孟くん、みずから趾を歩ませ、新しき酒と醬の二つの物 器に満たせるを てに領けてわれをと  
ぶらい、かれよりこの老夫に遺らる

楚のくにの 岸べにそうて 秋の屐の たがあしおとぞ 通じくる

胡じたての おりたたみ床 こしかけて 夕ぐれどきの 畦に面うときなり

さけをしぼるや 籍きぬののなかの 糟より さけ汁と 滓を 分かちきて

甕にあふるる 醬をば てに提げもちて携えくれば そのかたわらより こぼれ落つ

糲くろこめ げんまい 飯くらうとき 香かんばしき このひしおの味あじを 添そえくわえん  
 朋とも おとずれ来きたらば 泥どろのごと 醉よつばらうこと かならずや有あらん  
 生くらをたて 理とえゆくとに 那なんぞ 俗ぞくなるものを 免まぬれえん  
 つくりかた その方法ほうほうを 山やまずまいの わが妻つまに おしえ報しらせん

「ある日の夕方、当地の役所で下役人をやっている孟君が、できたての酒と醬じょうを器びいっぱいにいれ、手にさげて歩いてきて、わたしに贈ってくれた。」

ふるい楚の国でもあったここ夔州の、東瀼水のそばの住まいに、木靴の足音が川沿いに、聞こえてきた。秋の日の夕暮れ、西域風の折り畳み椅子を持ち出して、畑に向かって、座っていたときだった。

孟君は、酒しぼりの布のなかに入っている、どぶろく状態の醪もろみを漉こして、汁の部分と酒粕の部分に分けて、この新酒を作り出してきたのだ。また、大豆を主原料にして作った、どろどろの醬ひしおを、甕ひしおいっぱい満たして、手にひっさげて持って来たので、そのかたわらからこぼれ落ちた。

いい香りのするこの醬ひしおを、わたしは玄米に添えて食べることにしよう。友人が来たときには、この新酒で歓待すれば、おいしすぎて友人はきっと、泥酔してしまうであろう。

生活を切り盛りしていくには、こんな俗っぽい事柄からも逃れることはできない。この作り方を、わたしのいなか妻に教えてやることにしよう。

\* \* \*

隣人の孟君が、酒とひしおを持って来てくれたことを歌う。

まず詩題で目に付くのが「步趾」。実は他の詩から、孟君の家が隣家だったことが分かるのだが、歩いて来たことをわざわざ書き示すことによつて、日常生活の一コマのような身近な雰囲気を与えている。もう一つは「満器」。器から満ち溢れるほどいっぱいという書きぶりによつて、孟君の気持ち、有り余るほどたくさんあるのだ、ということを示している。詩四句めの描写によれば、多すぎるうえ、手にぶら下げて揺れるため、実際に器からこぼれ落ちている。孟君のあつい気持ちを、杜甫はこういう形でしっかり受け止めている。その心配りが読者にも伝わり、この詩をあたたかいものに仕上げている。

この五言律詩は冒頭の一、二句めから、対句で書き出される。杜甫にはこの形が少なくない。律詩としては、真ん中の四行を対句にするだけではないのだが、このようにすると初めから六句めまでが、みな対句となってしまう。しかし作爲の跡や過剰な感じを与えない。ややもすると、対句であることにさえ気づかない。それは、形式より内容の面白さに、まず読者がひかれてしまうからであろう。この詩も、よくできた対句の妙を味わう以前に、一見倒置されたように作られている構造へと、引き込まれてゆく。

孟君が酒とひしおを手を提げて、杜甫の家に向かっていてののだが、その姿は視覚的には描かれない。足音だけが岸辺沿いに聞こえてくる。杜甫

はそれを聴こうと耳を傾けているわけではない。ただ椅子に座って、自分の家の前の野菜畑を見ているだけである。そこにカランカランと木靴の足音が聞こえてくる。振り向けば、孟君が何か手に引つ提げて、こちらに歩いて来るではないか。その手持ちの一つは、酒だとすでに詩題で述べたので、詩の中ではその新酒がどのように絞りだされて、今、彼の手にあるのか、そこを想像して描いている。詩題と密接に連携した、この句作りの省略、呼応関係が、この詩を引き締めている。

この詩の面白いところは、熟成して、香りの高いひしおを、玄米に添えて食べよう、と詠じているところであろう。ひしお自体は、ひどく日常的な食べ物なのに、詩にはあまり出てこない。そういうものは、本来的には士大夫の「第一芸術」である詩には描かれない。それが普通である。描かれるようになるのは、日常を詩に描こうという意識が生じてから後の、中唐以降、とくに宋代以降のことである。まして、そんなものを玄米に付けて食べるなどと歌うのは、ほとんど杜甫のこの詩だけである。しかもそんな食べ方なんて、あまりにも質素すぎはしないか。しかし杜甫は、ハレの日ならぬケの日の、そんな食事の有り様を、いかにも嬉しそうに描いている。そんな卑俗で低い生活水準をむき出しにしたところから、一抹のおかしみもただよってくる。

ただ、この詩で酒を描く部分は、いたって平凡である。もろみをしほって酒と粕が分かたれるとか、友が来たら泥酔するだろうとか、杜甫の力点はそういう表現には無かった。杜甫が一番心を動かされたのは、うま味が発酵した、芳醇なひしおであろう。だから七、八句の最後で、一家のあるじとして生計を立てて行くには、こんな俗なことにも無関心ではおれない、などと弁解がましいことを言いながら、孟君から詳しく聞き出したに違いない、その作り方を、妻に知らせなくては、意気込んでいるのだろう。

わたしが最も注目したいのは、最後の一句である。杜甫以前、作者の妻が詩に描かれることは、その死を悼む「悼亡詩」などを除いて、ほとんど無かった。はじめて日常生活での妻を、たくさん詩に描き始めたのは杜甫の画期である。それにしても、これまで杜甫に描かれる妻は、まずは夫の妻として、さらに子の母としての姿であった。ところがここでは、料理をする妻が登場する。杜甫の詩といえども、これまで妻は料理、家事などとはほとんど関係なかった。それがこの最後の一句によって、妻の姿はにわかに生活臭を帯び、所帯染みってくる。これよってこの詩は、今まで誰も描かなかった詩になった。

これは杜甫が妻と、人生、生活のあらゆる面で、全面的に関わっていたということであろう。夫婦のそんな人間関係は今では当たり前であろうが、杜甫の時代の士大夫社会ではそうではなかった。第一、結婚は本人の意志とは関係なく、家どうしが決めるものだったし、恋愛結婚などあり得なかった。まれに有ったとすれば、それは非道徳として社会的、法的制裁を受けた。側室をとることが公認されていたことにより、子孫を作り、家を存続させるための正妻と、恋愛または性愛の対象としての側室の役割分担がなされていた。もちろん例外もあるが、一般的には正妻は、家の管理・存続・社交、子の教育・将来を話し合う対象であり、側室は愛を語る対象であった。料理や些細な家事全般は、さらに召使いたちに任せられたであろう。ところが杜甫の場合、そのすべてが妻に託されているのである。杜甫は、妻とそういう謂わば、近代的な夫婦関係を作りあげていたのだと思われる。

杜甫が時代に先駆けて、そういう人間関係を構築できたのは、ひとつは杜甫やその夫人の人間性によるものだろう。が、より本質的には、二三

人の使用人はいたにせよ、貧しい核家族の形で各地を転々とし、家族は生活のいろいろな場面で、互いに協力し合わなければならなかったからではないか。ここに杜甫の生活詩が生まれてくる土台がある。杜甫の生活詩は中唐の時代の先鞭とされるが、最終的には三千坪の広大な屋敷を持ち、多額の年金をもらい、屋敷には三人の、芸能と性愛の対象である、家妓を養っていた白居易などの、趣味的生活詩とはおのずと違うところもある。

## 九 棗は 隣の人の 打つにまかせよ

[2023] 又呈呉郎

大曆二年（七六七）の晩秋、杜甫は米の収穫を現地で点検するため、瀼西宅から稲田のある東屯に引越した。そのとき瀼西宅は、娘婿の呉郎に貸し与えていた。これはそのころの詩である。

東屯に移ったあとも、杜甫は白帝城のある夔州城内へ、しばらく行ったりしていた。

[2021] 暫往白帝復還東屯 暫く白帝のまちに往きて、復た東屯に還る

の詩が残っている。また瀼西宅に立ち寄りしたりしていたことも、

[2020] 從驛次草堂復至東屯茅屋二首 はくていの駅 従り うまをかり、じょうせいの草ぶきの堂に次り、復た東屯の茅ぶきの屋に至る

の詩からわかる。さらに、

[2024] 晚晴呉郎見過北舎 晩に晴れ、呉郎に、北のわが舎に過ぎらる

の詩では、瀼西宅に対して、自分の住む東屯の家を「北舎」と呼んでいる。杜甫は東屯に引込んでからも、瀼西宅は、何かとずっと関心の中にあつた。

ここで取り上げている詩の題は「又呈」となっており、このことから、この詩は杜甫が呉郎に与えた、二度目の詩だとわかる。最初に与えた詩は、

[2022] 簡呉郎司法 司法の呉郎に簡おくる

で、呉郎に瀼西宅を貸し与えた経緯などが述べてある。呉郎が杜甫の詩に出てくるのは、詩題に呉郎の名を記すこの三首である。

## 又呈呉郎 又た呉郎に呈す

堂前撲棗任西鄰、 堂前に棗を撲つは 西隣に任す

無食無兒一婦人。 食無く 児無き 一婦人

不為困窮寧有此、 困窮の為ならずんば 寧そ此れ有らん

祇緣恐懼轉須親。 祇だ恐懼するに縁れば 転つて須く親むべし

即防遠客雖多事、  
 便插疏籬卻甚真。  
 已訴徵求貧到骨、  
 正思戎馬淚盈巾。

即し遠客を防がば 多事と雖も  
 便ち疏籬を挿まば 却つて甚だ真ならん  
 已に訴う 徵求せられて 貧の骨に到るを  
 正に戎馬を思つて 涙 巾に盈つ

又たかさねて む二郎の 呉くん に このうた つくりて呈す  
 堂の前の わがやの棗 撲ちおとすも 西隣の なすがままに 任せしは  
 そのひと 食うもの無く 児も無き 一りぐらしの 婦人なればなり  
 ぐらしに困り窮る 為ならずんば 寧ぞ此のごとき おこない有らんや  
 祇だ 恐れ懼きつつ なせるに縁れば むしろ転つて きみ須く 親みをしめすべし  
 即しもそのひと 遠きよりきたる客に みがまえ防がんとすれば そは多なる事と雖も  
 便ちきみが 疏き籬 あらたに挿まば 却つて甚だ 真となり 貧さ骨に到ると  
 そのひと已にわれに訴う おかみよりきびしく 徵て求められ 貧さ骨に到ると  
 このとき われ正に 戎馬に思いをはせ 涙ながれて 巾に盈ちあふる

「ふたたび娘の婿君の呉くんに、この詩をさしあげる」

濃西のわが家の敷地内に植わっている棗を、西隣の住人が勝手に打ち落とすのを、わたしは為すがままにしておいた。食べ物も無く、息子もいない、一人暮らしの女だからである。おそらくは戦争で夫に死なれ、寡婦となったのであろう。

生活にとことん困り果てたので無ければ、どうしてこんな行いをするだろうか。隣家の女が、びくびくしながら、棗を打ち落としていることか  
 らすれば、むしろ君のほうとしては、かえって親切にしてあげた方がよいのではないか。

遠くからやって来た見知らぬ君を、隣家の女が警戒するのは、まったく不必要で余計なことではある。しかし、かといって君が、棗の回りに垣  
 根を立ててしまえば、かえって事は深刻になってしまふだろう。

隣家の女は、役所から税金を取り立てられ、骨の髄まで貧しく苦しい状況を、すでにわたしに訴えてきていた。こんな貧しい寡婦を目の前にし  
 て、まだ戦争が終わっていないことを考えれば、悲しみは深まるばかりで、涙でわたしのハンカチはぐっしょりと濡れてしまふ。

\*

\*

貧窮の極みにある隣人への、対応の仕方を、娘の婿にアドバイスした詩。貧者への、杜甫の仁愛を示す詩としてよく知られている。

よくもこんな複雑なことを、律詩の制約のなかで言うことができるものだと、杜甫の詩の技倆に驚く。会って口で言えば、簡単にすみそうなのを、わざわざ詩にしているように見える。あるいはすでに会ったときに、直接注意を喚起したのかもしれない。しかし面と向かって言えば、角が立つようなことも、詩の形でいえば、相手に受け入れやすい。中国では昔から、詩の効用の一つに、そんなことが挙げられていた。

杜甫は婿の呉郎に、三つのことを注意または要求している。一つは、隣の寡婦が家の棗を勝手に取っても、見て見ぬふりをしなさいということ。実は杜甫自身、呉郎に家を貸す以前は、実際に見ないふりをしていたのである。少し前に作られた詩に、

わがやの棗 熟せば となりの人の 打ちおとして とるに従す 棗熟従人打

〔2002「秋野五首」其一〕

とあり、同じような表現をしている。厳密に言えば、寡婦の行為は窃盗ということになるが、杜甫はそれに対して、「盗む」という言葉を用いていない。二度とも、棗を「打つ」「撲つ」という行為だけを取りだし、それに価値観を加えて断罪したりなどはしていない。まずしい婦人のやむを得ない行為で、窃盗と見なすべきではない、と杜甫は思っていたのだろう。杜甫の子供たちだって、自分の家の棗が減ることを、貧しい人のため、少しだけ我慢しているのかもしれない。

二つ目は、寡婦への接し方を娘婿に見している。隣の婦人は、自分がまずいことをしていると分かっていたの、謂わば確信犯だろうから、君にびくびくしているだろう。だからこそ君は、向こうの状況を察してやり、むしろやさしく、親切にしてあげないといけなさと忠告している。

常識的に考えれば、自分に悪いことをする相手には、怨んだり仕返しをしたりするのが普通であろう。しかし杜甫はそうではなく、汝の敵を愛せよではないが、逆に相手の、そうせざるを得ない苦しい心を思いやり、さらに優しさを示しなさいという。しかも相手は、一般士大夫の目から見れば、まことに取るに足りない貧しい一人の寡婦である。だからといって、彼女を人間以下に扱おうなどしていない。相手が貧しかろうと同じように平等に接しようとしている。

三つ目は、棗の回りに、わざわざ柵など作るべきではないと注意する。柵を作れば、隣家の所有物ではないことがはっきりし、寡婦の「違法」的行為が明示されてしまうからであろう。自己の所有物を囲い込むことが、その人の強欲さをむき出しにしてしまうことがある。しかし杜甫が懸念しているのは、そんなことではない。一個たりとも取らせまいぞという、冷酷な意志を見せつけ、そのことが、かえって弱者を鞭打つことになってしまう。そのことも杜甫は心配しているのかもしれない。

杜甫はこれまで、何度も社会の貧困を告発し、その貧困を作り出す為政者たちを批判してきた。そして貧困のどん底にあえぐ農民たちに、たくさんのお情を示してきた。しかしこの詩は、これまでのそうした、いわゆる批評家的詩とは、立ち位置が違う。自分の生活に直接関わってくる目の前の貧困に、杜甫自身が、あるいは杜甫と同じ階層の人間や家族の一員が、どういう態度で臨むのが述べられている。これまでは杜甫の告発詩、諷刺詩を、言うは易く行うは難しと、冷やかな目で見ていた人がいるかもしれない。しかしここでは、杜甫自身決して豊かとは言えないなかから、棗を分け与え、やさしい態度を取り、同じ目線で貧しい農婦の訴えを、親身になって聞き、涙を流しているのである。小さなことだが、どの詩人にもできることではあるまい。この行為、態度は、杜甫がこれまで行ってきた政治批判、そして貧しく弱きものへ抱いてきた慈愛と、首

尾一貫している。

ところで、吉野弘の詩に言うように「正しいことを言うときは、少しひかえめにするほうがいい、正しいことを言うときは、相手を傷つけやしないものだ、気付いているほうがいい」のであろう。杜甫もこの道理は分かっていたのだと思う。詩の初めから六行目までは、婿に対して、「あなたはくしなさい」という要求の形になっているが、最後の一聯のみが「わたしはくする」の形で、杜甫が主語となっている。杜甫が涙を流すのであって、婿にも憐れみの涙を流しなさいと要求しているのではない。

さらに、この詩には虚詞が多い。特に中の四行に、くの為ならずんば、寧ぞ、祇だく縁れば、転て、須く、即し、雖も、便ち、却て、などが集中している。虚詞の使用は、紆余曲折した気分を言い表すのに適している。虚詞がなければ、事実だけを述べることになる。この詩では虚詞を多用し、事実だけではなく、気分をも添えて伝えることによって、この言にくいことをやわらげている。

とはいえ、婿の立場としては、この詩をもらってどう感じたであろうか。一つ一つが、カチンと来たのではなからうか。婿君が凡人だったら、相当にうっとりしい舅に思えたに違いない。人へのお礼や感謝の詩では、あんなに気を使う杜甫も、実は身内や親戚には、相当に押しつけがましく無遠慮などがある。婿から見た義父、子から見た父が、どううつつっていたのか、詩聖杜甫とのギャップは面白い。

## 十 米を炊けば 白きこと銀のごとし

[2032\_02\_茅堂檢校收稻二首] 其二

大曆二年（七六七）、晩秋、夔州の東屯とうとんでの作。

杜甫は、夔州に到着した後、東屯という地に、何枚かの稲田の権利を所有したと思われる。東屯は、草堂河のそばの瀼西の居宅から、草堂河をさらに一キロ余りさかのぼったところにあった。草堂河に一本の河が合流する場所で、そこは昔から比較的広い水田が開けていた。

杜甫は、瀼西に移ってから、すぐさま東屯の稲田の管理をはじめたと思われる。とはいえ、杜甫自身は瀼西に住みつつ、水田の管理は張望という、現地の下役人にまかせていた。しかし、水遣り、除草など、米作りの肝要な時点では、信頼できる使用人の、阿段や阿稽あけを東屯につかわし、様子を見させていた。

やがて秋も深まり、稲も実ると、杜甫は、瀼西から東屯に、しばらく移り住むことにした。米の収穫作業の点検のためである。その間、瀼西の居宅は、娘婿の呉郎に貸し与えていた。それは前の詩で見たとおりである。

米の収穫を終えたあと杜甫は、城内での米相場を見ながら米を売り、翌春の旅の資金の一部としたと私は考えている。そして残りの米は、船旅にたずさえていく食糧の備えとした。

## 茅堂檢校收稻二首、其一

茅堂ぼうどう 收稻しゅうとうを檢校けんこうす、二首にしゅ、其その二に

稻米炊能白、炊げば能く白く  
 秋葵煮復新、秋葵 煮れば復た新たなり  
 誰云滑易飽、誰か云う 滑は飽き易しと  
 老藉軟俱勻、老いては藉る 軟にして 俱に勻おるに  
 種幸房州熟、種は幸いに 房州の熟  
 苗同伊闕春、苗は同じく 伊闕の春  
 無勞映渠碗、渠碗に映ずるを 勞する無く  
 自有色如銀、自ずから 色 銀の如き有り

茅ぶきの堂にて とりいれし稲を わがやに収めいるるを 検べ校ぶ  
 稲の米たる こめ 炊げば 能くのごとく白く  
 秋の葵は ややかたけれど 煮れば復た さらに新たなり  
 滑かなるもの みたされて飽きたり易しと 誰か云う  
 とし老いては このふたつの軟らかにして 俱に勻おるに たすけを藉る  
 種は 房州の よく熟る いね なりしを 幸いとし  
 苗は わがふるさとの 伊闕の春に 同じく すこやかなり  
 しろき渠がいの お碗に映えしむるを わざわざ 勞わすることも無し  
 自ずから この こめには 銀の如き ましろき色 有ればなり

「茅葺きの東屯の家で、収穫しおわった稲を取り込むのに、立ち会って検査をする」二首の其の二

東屯で収穫したこの米は、炊きあげるとこんなにも白く、やや固くなった晩秋のフユアオイは、煮ればまた取れ立てのように新鮮になる。

口当たりの滑らかな食べ物、食べやすいからすぐ腹一杯食べてしまい、かえって飽きやすいなどと、誰がいったい言ったのか。わたしはこの滑らかなフユアオイを、いくら食べても飽きはしないし、この白米はやわらかで、これをおかずにすれば、二つはともにもうまく調和する。老いた身にはそれがありがたく、わたしはそのおかげをこうもっている。

水田に植えられた稲の種は、「房州熟」という品種であったのが、なんとも幸いであった。というのも地名の「房州」に、よく熟して実るとい

う、縁起のいい「熟」の字が付けられているからだ。また、この稲の苗は、わたしの故郷の洛陽近くの、「伊闕」の地名を取った「伊闕の春」という品種と同じように、すくすくと育ってくれた。

もっと白く見えるようにと、この米を、南海産の貴重なシャコ貝で作った高価な、白い茶碗に盛りつけ、映えるようにする必要は無い。なぜならこの米には、もともと白銀のような輝く白い色があるからだ。

\* \*  
収獲したての米を、食べる喜びを歌う。

詩題の意味するところは、収獲作業を点検し管理することであり、詩の内容はそれから少しずれている。其の一の詩についても同じである。東屯で、杜甫が権利を有した水田は、稲作のために杜甫が新たに農夫を雇ったのではなく、もともと農夫が付随した形態の稲田だったと思われる。おそらく杜甫は、その収獲作業の点検、管理を、実際の農務に詳しいある中間的な管理者を介在させつつ、地主と同じような立場で行ったであろう。農奴にちかい、そのような農夫たちを目の前にして、杜甫とて複雑な心境だったに違いない。だから、その事実だけを詩題によって記し、詩にはむしろ収獲後の、心たのしくなる題材が、自ずと選ばれて歌われたのではなかったか。

少なくとも杜甫は、貪欲な地主にだけはなりたくなかった。だから他の詩では、落ち穂は村の子供らに拾わせようとか、自分の米蔵を満たすことだけを考えるようなことはすまい、などと繰り返し述べている。

いな穂の おちぼ拾うは 村の 童に許さん 拾穂許村童 [2031] 暫住白帝復還東屯]

遺ちし いな穂は われはひろわず 衆多くの ひとに及ぼし 遺穂及衆多、

我がこめ倉は 滋し漫たすことを 戒めん 我倉戒滋漫。 [1914] 行官張望補稻畦水歸]

ひとり我がこめ倉のみを 陵のごとくに たかくは せじ 不獨陵我倉

杜甫は一家十人ほどを引き連れ、このあとも苦しい旅を続けていかなければならない。これらの詩句には、一時的にも地主的役割を果たさねばならなかった杜甫の、そのぎりぎりのところでの良心が示されていると言えよう。

それはそうとして、旅住まいの杜甫にとって、米が収獲できることは安心の種であり、この上なく嬉しいことだった。

穀 なるものは わが命の本なり 穀者命之本、

客居の みには 安ぞ忘るべけんや 客居安可忘。 (同右)

春からはじめた稲田の管理は大きな天災も無く、なんとかうまくいった。いよいよ米が収獲できたという安堵感、喜びがある。そういうなかで、本章の詩も作られている。

一句めは今年収獲した米が、真っ白な御飯に炊きあがることを述べる。ずっと飛んで、七句め「渠の碗」は、シヤコガイ（碑礫貝）の貝殻で作ったお碗のこと。そのシヤコ貝の貝殻の材質は高級で、玉に次ぐといわれる。そのお碗に御飯を盛ると、玉のような高級材質の貝殻の色が映えて、さぞかし真っ白に見えるだろうけれど、今年とれたお米には、それは無駄な労力というもの。なぜなら炊きたての御飯は、銀のように白いのだから、と。ここで一句めと八句めがつながる。杜甫は他の詩でも、しばしば炊きたての御飯の白さ、その玉のような艶やかさに感激しているが、この感覚は、今日の我々とまったく同じである。米を主食とする人々は、古今東西みな似たような感覚を持つのだろうか。

ここで面白いのは、フユアオイをおかずとして一緒に食べていること、そしてそれをいちいち、詩に詠じていることである。フユアオイは今ほとんど、食べられることは無いと思うが、少なくとも十四世紀ごろまでは、野菜類の王者の座を占めていた。唐代はフユアオイは広く栽培され、よく食べられていた。杜甫もこの夔州時代、畑にフユアオイを植えていたが、杜甫がここで食べているのは、自分の畑にできたものかもしれない。そのフユアオイを煮ればなめらかになり、炊きたての御飯によく合うと詠じている。フユアオイがアオイ科で、オクラと同じであることを考えれば、滑らかだという食感も納得できる。唐詩にも、野菜としてのフユアオイはしばしば歌われるが、食感や食べ方まで立ち入って述べるのは、杜甫が初めてである。

中唐の白居易は、その言い方を下敷きにし、「葵を烹る」の詩で、

貧しき わが厨には ほかに何の有る所ぞ 貧厨何所有、

稲の みの こめを炊ぎ さらに 秋の葵を烹る 炊稻烹秋葵。

紅き こめの粒は 香しく 復た軟らかに 紅粒香復軟、

緑のふゆあおいのは なの英は 滑らかにして 且つ肥し 綠英滑且肥。

と歌っている。白居易は、中唐の時代における杜甫の発見者、鼓吹者の一人であり、よく杜甫を学んでいる。杜甫の生活詩は、白居易らの中継点にして、次の宋代に引き継がれていく。

古川末喜（佐賀大学 文化教育学部 日本・アジア文化講座）

本論は、学術研究助成基金助成金（基盤研究(C)）「中国古典文学におけるタブーの基礎的研究」（代表者…釜谷武志・神戸大学教授）の研究成果の一部である。